

# 前立腺がん

みなさんは泌尿器科医の仕事をご存じですか？ 内科や外科なら知っているけど、泌尿器科って何をしているのと思われている方も多いと思います。そこで、今回は泌尿器科医のしごとと、そのなかで増加の傾向にあり、臨床的にも重要な疾患となっている前立腺がんについて、ご紹介いたします。



泌尿器科医長  
奥村 幸司

## 泌尿器科医のしごと

泌尿器科では、尿が通過する臓器と男性の生殖器を診療します(図1)。これらの臓器が正常にはたつき、スムーズな尿の排泄が行えるようサポートするのが泌尿器科のしごととなります。

おもな疾患は、副腎腫瘍、腎腫瘍、尿路結石、尿路感染、膀胱や上部尿路の腫瘍、前立腺腫瘍(肥大症、がん)、神経因性膀胱、尿失禁、尿路性器の奇形、精巣腫瘍、男性不妊症です。

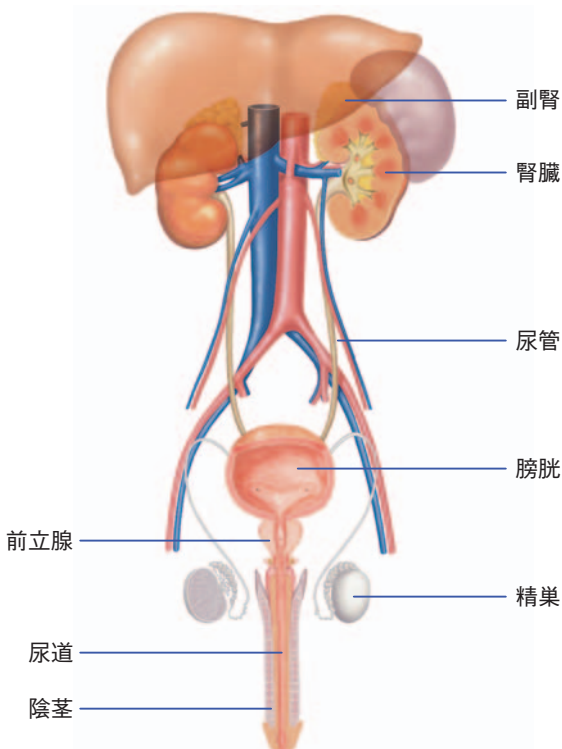


図1：泌尿器科があつかう臓器

## 前立腺腫瘍

前立腺腫瘍には、良性の前立腺肥大症と悪性の前立腺がんがあります。どちらも、おもに50歳以上の壮年期以降の男性に発症する疾患です。前立腺肥大症は、おしっこがでにくいことを主訴に受診されますが、前立腺がんでは初期には自覚症状がなく、検診などで採血(PSA検査)の異常を指摘され、診断されます。前立腺がんは現在増加傾向であり、当院ではとくにその診断・治療に力を入れています。

## 前立腺がんの診断

初期には症状がなく、採血(PSA検査)の異常を指摘され当科受診となります。PSA検査の結果と診察により、がんが疑われれば前立腺生検を行います。生検は肛門より超音波探子(プローブ)を挿入し、前立腺の画像を写しながら、針を刺入して前立腺組織

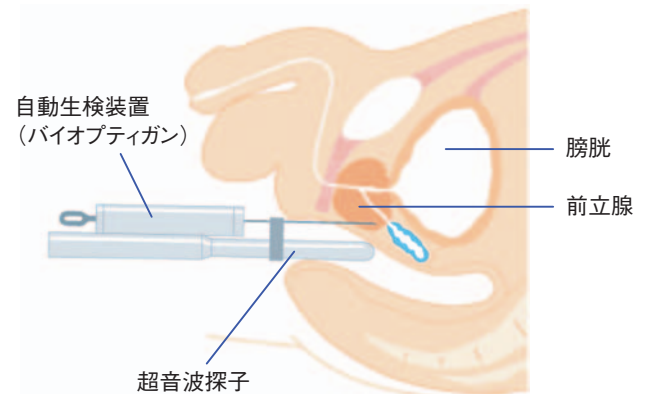


図2：前立腺生検の実際

を採取します(図2)。針刺入時の疼痛緩和のため、仙骨硬膜外麻酔を施行しますので、痛みはあまり心配いりません。前立腺生検は、まれにひどい出血、発熱をおこすことがあるため、現在は1泊2日の入院をし、検査を行っています。

生検によりがんと診断されれば、画像検査(CT、骨シンチなど)を行い、病気の広がり(病期)を確認し、病期に即した適切な治療法を、患者さまと相談しながら決めていきます。

## 前立腺がんの治療

治療の選択肢には、経過観察、手術、放射線治療、内分泌治療があります。

経過観察とは、無治療で経過観察し、病気が進行してから治療を開始する方法で、前立腺がん特有の治療選択肢です。このがんは従来進行が遅いことより、診断時の年齢が高齢で、無治療でもがんで亡くならないことが予測される場合に限り、経過観察が選択されます。一般的には、これを除いた3つの治療法(手術、放射線治療、内分泌治療)を単独あるいは組みあわせて行います。

年齢が比較的若く(一般的には75歳まで)、病気が前立腺内にとどまる早期の場合は、根治療法としての手術や放射線治療を、転移などを認める進行例や高齢の方には内分泌治療(病気を抑える治療)を選択します。

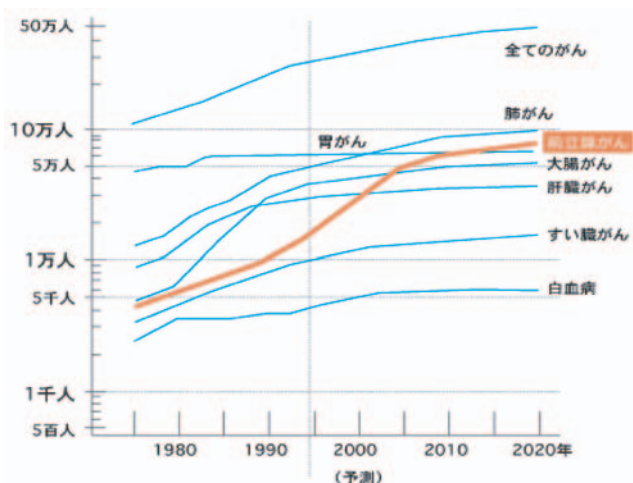


図3: 日本男性の各がんの毎年の発症数

大野ゆう子ほか: 日本のがん罹患の将来推計がん・統計白書  
— 罹患/死亡/予後 —  
篠原出版新社, 東京, 2004

## おわりに

現在、日本は高齢化社会をむかえ、今後ますます前立腺がんが増加することが予測されています(図3)。治療の選択肢が多く、高齢の方が多いため、病期の進行のみではなく、全身状態、年齢、社会環境および患者さまの希望を考慮したうえで、一人ひとりに最も適切と思われる医療の提供をめざしています。

最後に、インターネットが可能な方は以下のホームページをぜひご参照ください。前立腺がんの診断・治療について患者さま向けにわかりやすく解説しています。

ホームページ: <http://zenritsusen.jp/>

### 前立腺検診のすすめ

前立腺がんは初期には症状がありません。

男性は50歳を過ぎたら、年1回は前立腺検診を受けましょう。

検診は採血(PSA検査)のみです。



### PSA値 判定の目安

4 ng/mL以下 ▶ 正常

定期的にPSA検査をして経過を見守ります

4.1~10 ng/mL ▶ グレーゾーン

がん以外に前立腺肥大症など、前立腺の他の病気が含まれている可能性があります

10.1 ng/mL以上 ▶ がんが疑われます

高くなるほどがんの可能性が高くなります